『中央学術研究所紀要』第52号抜刷
令和5年11月15日発行

翻刻『高嶺君遺稿』「印度哲学」

―原坦山の東京大学仏教学講義を探る糸口―

佐　藤　　厚

翻刻『高嶺君遺稿』「印度哲学」

―原坦山の東京大学仏教学講義を探る糸口―

佐　藤　　厚

1　問題の所在
2　『高嶺君遺稿』「印度哲学」と原坦山の授業との関連
3　まとめに代えて
翻刻：『高嶺君遺稿』「印度哲学」

1　問題の所在

筆者は近年、明治10年代から20年代初めに行われた東京大学における仏教学講義に関心を持っている。その理由は、筆者の研究対象である哲学館（現在の東洋大学）創立者・井上円了（1858-1919）が明治16年度と17年度に東京大学文学部哲学科の３年生、４年生として仏教学講義を受講していることから、その講義の内容を明らかにすることが円了思想の背景の解明につながるからである。同時にそれは、大学という場における近代的な「学」としての仏教学の成立を考える上でも重要であるといえよう。

この時期の仏教学講師は、原坦山[1]（1819-1892）と吉谷覚寿（1843-1914）の二人である。原は曹洞宗僧侶であり、幕末維新期には曹洞宗を代表する僧侶として活躍しており、東京大学総理･加藤弘之（1836-1892）の推薦で「仏書講義」という臨時の科目を文学部哲学科に設置するときに講師となり、明治20年まで講義を行った。一方、吉谷は真宗大谷派の学僧であり、教理に弱いと考えられた原をカバーするために招聘され、明治14年から22年まで講義を行った。

この中、吉谷の講義内容については本誌46号（2017年）に寄稿させていただいた。研究方法は、基礎資料として学年末に講師が作成した「申報」という教務報告書から、教材や教育方法、学生の人数などを取り上げ、それに補助資料として教材そのものや受講生の回想などを加えた。筆者は原の講義内容についても関心を持ち先行研究に追加できる材料を探していたところ、今年（2023年）、峰虎渓（玄光）「原坦山師時代に

[1]　原坦山についての最新の研究はオリオン・クラウタウ『近代日本思想としての仏教史学』（法蔵館、2012年）中の第一章「「日本仏教」以前：原坦山と仏教の普遍化」の75頁にまとめられている。

おける帝国大学の仏教研究」という論文を発見した[2]。これは明治36年（1903）に曹洞宗の峰玄光が刊行したもので、内容は、原が東京大学の講師時代に出題した試験問題と学生の点数が記された資料（明治14年度から17年度までの４年分）である。例えば明治14年11月に行われた試験では、「１仏教の大旨」など５問が出題され、それに対する成績が、「85点　選科生　嘉納治五郎、70点　４年生　有賀長雄、67点　３年生　三宅雄次郎、65点　２年生　森可次」などと記載されている。これは現代であれば個人情報の公開として大問題になるであろうが、この当時には問題になった形跡はない。

これにより教務報告書である「申報」に加え、原の授業の具体的な内容をうかがう資料を手に入れることができるようになったのである。そしてこれを今年（2023年）５月に東北大学で開催された近代日本仏教史研究会で発表させていただき、論文は原

（表１）原坦山と吉谷覚寿の東京大学仏教講義：明治12年から明治21年

年度（明治）	学年	原坦山			吉谷覚寿		典拠
年月-年月		教材	数	聴講／学生	教材	数	
12年度 12.9-13.7	随意	大乗起信論 百法明門論解 輔教篇 円覚経	?	井上哲次郎　加藤弘之 西村茂樹	—	—	★仏書講読 井上哲次郎自伝、西村茂樹全集、申報（坦山）
13年度 13.9-14.7	随意	同上か？	?	?	—	—	申報（坦山）
14年度 14.9-15.7	３、４年	輔教篇	4	嘉納治五郎　有賀長雄 三宅雄次郎　森可次	八宗綱要	?	★この年から正科 申報（坦山、吉谷）峯論文
15年度 15.9-16.7	３、４年	維摩経	2	三宅雄次郎 棚橋一郎	四教儀	?	申報（坦山、吉谷） 峯論文
16年度 16.9-17.7	３、４年	輔教篇 大乗起信論	2	棚橋一郎 井上円了	八宗綱要	?	申報（坦山、吉谷） 峯論文
17年度 17.9-18.7	３、４年	維摩経	6	井上円了　日高真実 長澤市蔵　板倉銀之助 戸田恒太郎　松本源太郎	四教儀？	?	峯論文
18年度 18.9-19.7	２、３年	大乗起信論	13	？井上円了 ？清沢満之	八宗綱要	13	申報（坦山、吉谷）
19年度 19.9-20.7	２、３年	円覚経	13	？清沢満之　上田万年 高嶺三吉（選科３、病没）	四教儀	9	申報（坦山、吉谷）
20年度 20.9-21.7	２、３年	大乗起信論？	?	上田万年 三上参次　谷本富	仏教要旨	9	申報（吉谷）
21年度 21.9-22.7	—	—	—	—	仏教要旨	14	申報（吉谷）

＊峰論文＝峰虎渓（玄光）「原坦山師時代に於ける帝国大学の仏教研究」

＊吉谷覚寿の講義については、佐藤厚「吉谷覚寿の東京大学仏教学講義」（中央学術研究所『中央学術研究所紀要』46、2017年）によった。

[2] 雑誌『仏教文芸』２巻１号（1903年10月）と同巻２号（1903年11月）

にゆかりのある駒澤大学の論集[3]に掲載させていただくことにした。

こうして初期の東京大学の仏教学講義の内容が、完全ではないが、明治12年から21年まで明らかになった。前頁の（表１）は駒澤大学の論集にも出した、原と吉谷の講義を整理したものである。

この中、本稿で問題とするのは、表の中の明治19年度に行われた原の講義（網掛けになっている部分）である。申報では『円覚経』を講義するとなっているが、この年度の試験問題は残っていないために詳しいことはわからない。

ところで、明治19年に夭折した東京大学学生の高嶺三吉（1862-1887）のノートが、坦山の講義と関係あることに気付いた。そこで本稿では、高嶺の遺稿『高嶺君遺稿』「印度哲学」と原の講義との関連を論じ、次いでそれを翻刻して、今後の研究の参考に供しようと思う。

２ 『高嶺君遺稿』「印度哲学」と原坦山の授業との関連

『高嶺君遺稿』は東京大学在学中に亡くなった高嶺三吉の授業ノートを友人の早川千吉郎が編集し明治21年（1888）６月に刊行したものである。これには原坦山、寺田福寿、吉谷覚寿、生田（織田）得能が序、跋文などを著わしている。国会図書館のデジタルコレクションで閲覧が可能である[4]。

図１ 『高嶺君遺稿』書影
（国会図書館デジタルコレクション）

内容は

①印度哲学（pp.1-55）

②老荘の道徳と儒教の道徳との同異（pp.56-64）

③降霊術を論ず（スピリチュアリズム）（pp.65-88）

の三部からなる。

この中、②老荘の道徳と儒教の道徳との同異は、島田重礼（1838-1898）の中国哲学の講義ノートと考えられる。③降霊術を論ず（スピリチュアリズム）は、もともと英語で書かれたものであるが、それを清沢満之と岡田良平が日本語に翻訳したものである。

では①印度哲学に入る。印度哲学の内容は、第一回から第五回に分かれ、それぞれの回ごとに第一から第五に主題が分かれている。それらをまとめると（表２）のよう

[3] 拙稿「原坦山の東京大学仏教学講義」『駒澤大学仏教学部論集』54号（2023年10月刊行予定）

[4] 高嶺三吉 稿 ほか『高嶺君遺稿』、早川千吉郎、明21.7. 国立国会図書館デジタルコレクションhttps://dl.ndl.go.jp/pid/816860（参照2023-09-01）

（表２）『高嶺君遺稿』「印度哲学」の構成

第一回 第一　仏教大意 第二　仏教と他教との区別 第三　一心摩訶衍 第四　心真如 第五　心生滅	第二回 第一　真如と生滅との分界 第二　始本二覚の弁 第三　真如本覚の同異 第四　無明の実体 第五　迷悟の顕相	第三回 第一　円覚 第二　仏性 第三　一法 第四　正因 第五　止観定恵
第四回 第一　無明 第二　本来成仏 第三　輪廻 第四　二障 第五　方便三種	第五回 第一　本学特別の主義 第二　一大事因縁 第三　蔵来の概略 第四　修証の概略 第五　金鉱の法理	

になる。

詳しい内容は、巻末の翻刻を見ていただくこととして、概括的なことを述べると、第一回は、まず「第一　仏教大意」、「第二　仏教と他教」との区別で仏教そのもの中心的な意味を明らかにし、「第三　一心摩訶衍、第四　心真如、第五　心生滅」は『大乗起信論』の中心的な概念を述べている。第二回に入り、「第一　真如と生滅との分界」から「第五　迷悟の顕相」までも『大乗起信論』の内容と考えられる。そして第三回から『円覚経』の内容に入り、これは第四回も同様である。そして第五回はやや系統が異なり、「第一　本学特別の主義」は印度哲学の特別の主義として「一心の真性を発明することにある」とする。以後はやや仏教総論的な内容をもって終わる。

筆者はこれが原の授業のノートであると考えているのであるが、その根拠を述べる。

第一に、一回につき五問程度の問題を出す形式が、原の試験形式に似ていることである。前述の峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」には原の試験問題と点数が記されているのであるが、明治16年度の試験を掲げると（表３）のようになる。[5]

これを一瞥しただけで、『高嶺君遺稿』の構成と同じことがわかるであろう。内容を見ても、第一回の「第一　仏教の大旨」「第二　仏教と他教との異同」は『高嶺君遺稿』とほぼ同じ。第二回以後の『大乗起信論』の教理を問う問題も同様のものが多いことがわかる。

第二に、前掲の（表１）にも掲げたように、高嶺が原の講義を受講した明治19年度に、原が『円覚経』を講義していること。

第三に、同じ仏教学の講義である吉谷覚寿のものは『高嶺君遺稿』とは別に編集さ

[5] 峰玄光「原坦山師時代における帝国大学の仏教研究」（『仏教文芸』２巻２号、1903年11月）４頁から構成

（表３）原坦山の明治16年度の試験

第一回 第一　仏教の大旨 第二　仏教と他教との異同 第三　仏教性情の分解 第四　五乗の弁解 第五　三世輪転の説	第二回 第一　心真如 第二　心生滅 第三　本覚 第四　始覚 第五　無明
第三回 第一　真如生滅の別相 第二　真如本覚の異同 第三　始本二覚の弁 第四　経論中何爲そ無明の実体を説さる 第五　何を以て迷悟を実験するや	第四回 第一　心真如之実体 第二　心生滅之現象 第三　常住心性 第四　染相本末 第五　従生滅門入真如門

れていることから[6]、仏教学の内容であるこの資料が原のものと考えられる可能性が高いこと。

第四に、『高嶺君遺稿』の序文で坦山が、内容的に自分の添削を経たものであると言っていること。

> 高嶺氏之遺稿不多、纔存是一冊、蓋皆在学之日、係余之験閲者。（『高嶺君遺稿』一頁）
>
> 高嶺氏の遺稿、多からず。纔かに是の一冊を存す。蓋し皆な在学之日、余の験閲に係る者なり。

「余の験閲に係る」は原の目を通ったものを意味すると考えられる。つまり原の試験問題への高嶺の解答だが、そこに原の添削が加わったものと考えられる。

これらから、『高嶺君遺稿』「印度哲学」が坦山の授業の時の高嶺のレポート、試験であった可能性が高い。もしそうだとすれば、授業そのもののノートではないにせよ、授業内容をより具体的に伺うことができる貴重な資料である。

3　まとめに代えて

紙幅の関係で、内容に関する詳しい研究は今後に待たなければならないが、現時点で一つだけ重要と思われることを述べる。それは『大乗起信論』についての見解である。原は曹洞宗僧侶であるが、ただの禅宗僧侶ではない。『大乗起信論』にもとづく独自の身体理論を構築した人物である。その概要は、人間の心は脳にあるとし、脳は本

[6] 鈴木朋子『『高嶺遺稿』印度哲学（吉谷覚壽口授・天台四教儀）翻刻』（お茶の水女子大学附属図書館、2019年）

来的に清らかな状態なのであるが、煩悩＝不覚心によって穢されている。原は、不覚心は腰にある粘液であり、それが脊髄を通って脳に達し、清浄な心（覚源）と混じりあい和合心の状態を形成しているという。そしてこれを清浄な状態に戻すには坐禅を行う必要があり、原はこれを自ら実践して死にかけたこともあるという。原はこうした自分の学説を『心性実験録』などにまとめ、福沢諭吉や各国の大使館などに送ったが、相手にされなかったという。

そうしたことから考えると、原は大学の授業でも独自の仏教身体論を説いていたのではないかという推測が成り立つ。しかし『高嶺君遺稿』を読んでみると、『大乗起信論』の概念の解説は極めて常識的である。予想では無明について論じる部分に仏教身体論が現れるのではないかと期待するが、

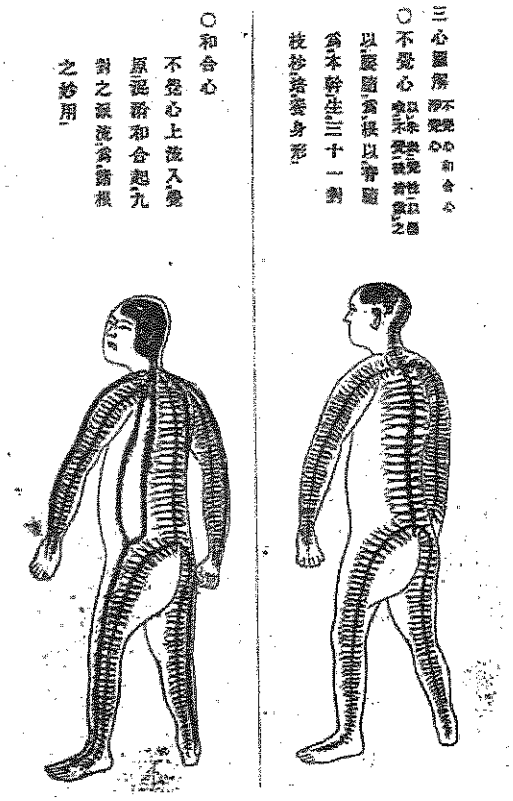

図２　『心性実験録』中の「三心図解」に説かれる不覚心と和合心（国会図書館デジタルコレクション）

> 無明ノ実体、果シテ有カ無カ、將又有無カ、是レ吾々凡夫ノ能ク得知スヘキニアラス、何トナレハ吾々生レナカラニシテ無明ノ為メニ熏習セラレ、常ニ無明ヲ脱スル能ハサルヲ以テ、安ソ能ク無明ノ実体ヲ知ランヤ、（『高嶺君遺稿』第二回、第四「無明ノ実体」22頁）

として無明の実体は知りえないことが説かれている。これはそんなに変わった説ではない。もちろん、これは高嶺が書いたレポートで、授業内容を記したノートではないから講義が反映されなかったとも考えられよう。しかし、授業内容を全く踏まえずに書いているとも考えにくい。さらにこれは原坦山の添削を経たはずのものである。すると、原の『大乗起信論』についての考え方は、自説として説くときには仏教身体論を論じても、授業という場においてはそうではなかったのか、という予想も立てられる。

ただ、明治20年に『大乗起信論』を受講した谷本富（1867-1946）は、原が授業の中で、上述したような仏教身体論を講義していた様子を次のように説いている。[7]

私共の先生に ド偉い先生があつた。それは禅宗で、明治初め頃には或は禅宗第一の人傑だと言はれた原坦山と云ふ人であります。背の低い事私と同じである。そして私より一層肥えて居た。其人が東京の大学へ来て『大乗起信論』を講義をする。無明業障とやる・・・。

無明は何ぢや、一体由来が分らぬ。お前達に分るまい。ワーツと云ふ様な大きな声を出して遣る。此無明と云ふのは、昔から八家九宗あるけれども、どいつもこいつも分つた奴がない。是が分つたのは坦山一人ぢや。之を変なものと説くから幽霊の様になるのぢや。幽霊などが仏教の悟りの上に在つて堪るものか、馬鹿な奴ぢや。坦山は分つて居ると。斯う云ふ風にやる。さうして大きな草紙の様なものを擴げる。黒板は使はぬ。又あの調子では黒板は使はれぬ。「皆能く見て居れ」と言ひながら、大きな字を白紙に書いたのを机の前に下げる。「ホーラ見ろ、能く見ろ、斯う能く見ろ、斯う云ふ文字ぢや」と云ふのです。無明と云ふものは空なものではないと云ふのぢや。無明は無明と云ふものがあつて眼に見えるのぢや。無明と云ふ奴があるから、迷ひが起るのぢや。無明をなくしたら宜い。能く見い此処にあるのが脳髄ぢや。此処にあるのが脊髄ぢや。此処にあるのが神経ぢや。脳脊髄の兩脇に黒い筋がある、これが無明だ。粘纏溷濁の液ぢや。此液を持つて居るから、神識が明かでなくて、無明業障と色々な迷が起るのである。若し座禅修行をして自分で悟りを開けると、此黒い液が追々澄む。その澄んだ処が悟りの開けた仏菩薩の境涯ぢやと。

引用からは、原が授業において独自の理論を好き放題展開している様子が窺える。では明治19年と20年と１年の違いで授業のスタイルが変わったのか？これらは今後、考えていかなければならない問題である。

[7] 谷本富『教育と宗教』（同文館、1925年）535-537頁

翻刻：『高嶺君遺稿』「印度哲学」

凡例

・これは早川千吉郎編『高嶺君遺稿』「印度哲学」の翻刻である。
・底本は国会図書館デジタルコレクション所収本である。
・原文は縦書きであるが本論集の執筆要綱に則り横書きにした。
・原書の頁数は（p.1）と示した。
・句点（、）を付した。
・漢字は新字にした。
・略字は次のように記した。𠮷＝ドモ、𠂆＝コト、〆＝シテ、ゝ
・判明する限り、経典名は『』、引用は「」で示した。

（p.1）

印度哲学

第一回

第一　仏教大意

夫レ仏教ノ本旨ハ衆生ノ本体乃チ真如ノ一理ヲ発見スルニアリ、而シテ此真如ノ理タルヤ、古今同一理ナラサルヘカラス、若シ真如ニシテ二アラハ、之レ真ノ真如ニアラサルナリ、固ト真ノ真如ナルモノハ両立スヘカラス、必ス一定ニ帰スヘキ者ナリ、然ルニ仏所説ノ法、此ノ如ク繁多ナルハ何ノ故ソヤ、曰ク是レ所化ノ心、煩悩ノ為ニ乱レ、種々ノ変体ヲ呈スレハナリ、所化ノ心彼（p.2）是相異ナレハ、随テ之レヲ化スルノ法異ナラサルヘカラス、猶ホ病人ヲ治療スルニ、其レ之レニ施ストコロノ薬剤、病ニ由テ殊別ナカルヘカラサル如シ、此ニ於テヤ大小乗ノ別アリ、有情非情ニ由テ異法ヲ立ツル所以ナリ、然リ而シテ其目的トスルトコロハ、真如ノ一理ニ過キス、彼ノ真如ナル者、終始、衆生中ニ保存シ、蒼々其色ヲ変セス、今之レヲ水ニ喩ヘンニ、其風ニ由テ波濤ヲ起スハ猶ホ煩悩ノ為メ心ニ諸惑ヲ生スル如ク、而シテ心ノ本体常ニ存シテ失セサルハ、猶ホ海水ノ本体ハ常ニ水ナルカ如シ、蓋シ仏深ク衆生ノ本心、煩悩ノ為メニ蔽（p.3）ハレ万端ノ憂苦ヲナスヲ憫ミ、之レカ為メ心ノ本体ヲ発見シ、以テ諸惑ヲ覚ラシメ、遍ク衆生ヲシテ仏ノ利益ヲ得シメンカ為メニ彼諸法ヲ説タルナリ、故ニ仏教ハ之レ救世ノ一大教ト云モ、決シテ誣言ニアラサルヘシ

第二　仏教ト他教トノ区別

既ニ弁セシ如ク、仏教ノ本旨ハ真如ノ理ヲ発見スルアルヲ以テ、之レヲ発見スルニ付テ、亦タ仏教ニ特別ナル方法無ルヘカラス、其第一ハ諸行ヲ無常ナリト立ルコト之ナリ、一切宇宙間ノ万物、因縁ノ合成ニ依テ千変万化無極ナリ、或ハ草木トナリ、或ハ

禽獣トナリ、或ハ人間（p.4）トナリ、而シテ尽ク栄枯生死ノ命数アリ、又其内ニ起ル念慮情慾ハ終始遷転、恰モ流水燈火ノ如シ、或ハ笑ヒ、或ハ悲ミ、或ハ怒リ、或ハ憂ヘ、山ヲ思ヒ、川ヲ思フ等、千慮万思出没シテ間断ナキ、水火ノ行テ止マラサル如キナリ、之レヲ諸行無常ト曰フ、其二ニ諸法無我ト云フコトアリ、一切ノ有為無為法、共ニ別体ノ実我ナルモノナク、唯仮我アルノミ、何トナレハ、有為ノ諸行、則チ上ハ日月星辰ヨリ下ハ山川草木人獣ニ至ルマテ、尽ク五蘊ノ和合ヨリ成ルナリ、故ニ山川モ日月モ、之レヲ分解スレハ五蘊ノ元素ニ帰ス、唯五蘊和合ノ変化ヨリシテ斯ル日月山（p.5）川ノ区別ヲ生スルナリ、猶ホ大工ノ同シ材木ヲ用テ宮殿樓閣ヲ築キ、又能ク室内須器ヲ作ルカ如シ、宮殿ヤ須器ヤ其形ニ就テ見ルトキハ相異ナルモ其質ヲ尋ヌレハ同一材ナルカ如シ、若シ有為ノ万物、信ニ実我アラハ何ソ生死存廃アル可ンヤ、草木ハ常ニ草木ナルヘク、人獣ハ常ニ人獣ナル可シ、而シテ古ヨリ百歳ノ翁アルモ、千歳ノ翁アルヲ聞カス、千年ノ松アルモ百世ノ松アルヲ見サルハ何ソヤ、生死ハ人ノ常、栄枯ハ物ノ典ナレハナリ、故ニ有為ノ諸法ハ五蘊ノ体ヲ離レテ実我ナキコト明ナリ、無為ノ真理ノ如キモ不生不滅ノ法ニシテ無相無色（p.6）更ニ堅実ナル別体アルニ非ス、無我ナルコト理ノ当然ナリ、其三ニ涅槃寂静ト言コトアリ、此ハ煩悩所智ノ雑染ヲ寂滅シテ心ノ本性ヲ覚スル義ナリ、蓋シ元ト純浄ナル心性、諸惑ノ為メニ汚涜サレ無明ノ相トナルカ故ニ、強メテ静心安座、以テ念ヲ離レ煩惱心ヲ壓ヘ、所智障ヲ闢キ心性ヲ発覚スルノ方法ナリ、而シテ覚ニ前後アリ、深浅アリ、此ニ於テカ本覚ト始覚トノ別アリ、以上三法ハ仏神臆ヲ閡礙セシ者ニシテ、仏教中最モ注意スヘキ要領ナリ、或ハ之ヲ三法印義トモ言ヒ、仏教ト非仏教トヲ分識スル三大標準ナリトス、次ニ仏教ト他教ト大ヒニ（p.7）異ナル所以ハ、善悪業感ト云コト之ナリ、仏、善悪業感ヲ過現未ノ三世ニ通シテ説ケリ、則チ過去世ニ於テ善業ノ因ヲ遂ケタル者ハ、現世ニ於テ善果ヲ結ヒ、現世ニ悪業ヲ犯シタル者ハ必ス来世ニ悪果ヲ受ル等是ナリ、如此、過現未ノ三世ニ渡リテ因果ヲ解クトキハ、大ニ其理ヲ明ニスルカ如シ、何トナレハ現世ノミニテ因果応報ヲ説クトキハ、往々其理ニ適ハサル場合アレハナリ、仮令ハ盗跖ノ暴行、不仁ニシテ栄利長寿ナル有リ、顔回ノ有道、慈善ニシテ不幸短命ナルモアリ、是レ大ヒニ因果ノ理ニ背クカ如シ、而レトモ今之ヲ三世ニ通観シテ論スルトキ（p.8）ハ乃チ盗跖ノ能ク栄利長寿ナルハ、過去世ニ於テ遂ケタル善因ノ報酬セルナリ、顔回ノ不幸短命ナルハ前世悪因ノ果ナリト説ク、蓋シ仏、深ク凡夫人ノ顔回カ不幸短命ヲ思フテハ有道慈善ヲ去リ、盗跖カ栄利長寿ナルナ聞テハ暴行不仁ニ傚ハンコトヲ恐レ、此ニ於テヤ三世ノ次第ヲ立テテ善悪業感ノ理ヲ詳明セリ、抑モ善悪業感ノ理ハ、仏教ニ固有ナル大切ノ教ニシテ、他教ニ於テ嘗テ見ル能ハサルトコロノ者ナリ、

第三　一心摩訶衍

摩訶衍トハ大乗ト云フ義ナリ、摩訶トハ大ト訳シ、衍ト（p.9）ハ乗ト訳ス、乗トハ

運載ノ義ニシテ、業、人ヲ載セ因ヨリ果ニ運フ義ナリ、又大小乗ノ別アリ、大乗トハ自利ト利他トヲ具有シテ大人所乗ノ法ナリ、小乗トハ自運ノミアリテ他運ヲ缺ク、之レ小人所乗ノ法ナリ、扨テ仏、菩薩等ノ大人、大ヒニ衆生ノ、惑ヲ懐キ邪執ニ陷ルヲ憫ミ、遍ク衆生ヲシテ、惑ヲ去リ邪執ノ念ヲ離レテ仏垂ノ境ニ入ラシメント欲ス、是レ乃チ摩訶心ヲ起ス所以ナリ、

第四　心真如

心真如トハ、心ノ本性ニシテ、不生不滅、瞬時モ遷転セス、又如何ノ方法ヲ以テスルモ決シテ破壊スヘカラス、寂（p.10）然動カス巍然トシテ存ス、而シテ此ノ心真如ナル者ハ一切妄念ノ境界ヲ脱シ、又言説ノ能ク説明シ文字ノ能ク陳述スルトコロニアラス、何トナレハ心真如ナル者ハ無形無色、更ニ名狀スヘカラサルノ無相体ナレハナリ、蓋シ真如ノ二字ハ、以テ離言ノ境ヲ指示ス者ニシテ、所謂因言遣言ナリ、真如ノ二字ナクンハ、以テ言ヲ遣ル可ラス、而シテ既ニ真如ト言ヘハ言アリ、故ニ真如ハ言ト離言境トノ中間ニ立ツ極言ニシテ、以テ無相無形ノ心性ヲ示命スルナリ、此ノ如ク、心真如ハ無相無形ノ心性ナレハ、此ノ心性ノ境ニ入ランニハ、妄念ヲ脱却シ煩（p.11）悩ヲ擲棄セサル可ラス、若シ其心煩悩ノ為メニ蔽ハルルトキハ、月ニ群雲ノ如ク、到底皎々タル真如ノ月ヲ仰ク能ハサル可シ、是ヲ以テ彼衆生ハ始ヨリ真如ノ境ニ入ルヘカラス、必シモ菩薩ノ坐下ニ就テ、其示教ナ蒙ラサルヘカラス、孜々勉勵、怠ラスンハ、漸々妄念ノ妄念タル所以ヲ察シ、一切法ハ能説ノ可説ニアラス、能念ノ可念ニアラサルヲ知ルニ至ラン、如此强メテ倦マサレハ、其終ニ離念ノ境ニ入リ、心ノ本性ナ見ルヲ得ルコト疑ナキナリ、以上、言ヲ離テ心真如ヲ説ハ如此ナリ、今言説ニ依テ心真如ヲ分別スレハ二種ノ義アリ、曰ク如実空、曰如（p.12）実不空是ナリ、如実空トハ虚妄ノ心念ヲ離レ、一切ノ染毒ヲ脱シ、真如ノ自性純浄明白、更ニ一点、煩悩ノ曇リナキヲ以テナリ、如実不空トハ、真如ノ自体本来存在シテ少シモ其本性ヲ失セサレハナリ、猶水ノ塵芥ノ為ニ濁ラサレタルカ如シ、之ヲ蒸溜シテ塵芥ヲ無クスルハ水ノ如実空ナリ、又水ノ本性ハ濁水中ヨリ存在シテ毫モ其性ヲ変セス、今ヤ始メテ其本性ヲ顕ハスコトヲ得ルハ、之レ水ノ如実不空ナリ、故ニ真如ノ相ハ有ルカ如ク無キカ如ク、有相ヲ必ス可ラス無相ヲ必ス可ラス、又有無俱相ニモアラス、蓋シ心真如ハ離念ノ境界ナレハ、念相（p.13）ノ相ナキコト決セリ、而シテ真如ノ本体ノ相、始ヨリ存セサル可ラス、而シテ本体ノ相ハ念相ノ相ト大ヒニ異ナラサルヘカラス、故ニ復タ無相ト言モ、敢テ不可ナキナリ、故ニ曰ク、心真如ハ其能ク無相ナルヲ以テ真相ナリト言ハハ、稍ヤ信ナルニ近カラン乎

第五　心生滅

心真如ハ常ニ不生不滅、心生滅ハ常ニ生滅アリ、其生滅ナルト不生滅ナルヨリ見レハ、

互ニ相容サルカ如シ、而レトモ其不生滅アレハ必ス生滅アリ、生滅ヲ離レテ不生滅ナク、常ニ和合シテ相離レサルヨリシテ考レハ、其本（p.14）体乃チ同一ナラサル可ラス、之ヲ海水ニ喩ンニ、其波濤ハ常ニ動体ナリ、而シテ海水ハ常ニ不動体ナリ、動ト不動トヨリシテ察スレハ、各別体ナルカ如シ、而シテ波濤ハ常ニ海水ニ起リ、風止メハ従テ浪濤ナキヨリシテ之ヲ推セハ同一体ナルカ如シ、蓋シ心生滅ハ煩悩ノ風ノ為メニ起サレタル真如ノ波濤ナラン、此ノ二ツヲ備ヘタルモノ、之ヲ阿梨耶識ト曰フ、此識二種ノ義アリ、曰覚曰不覚、覚トハ心身ノ念慮ヲ離レ、俗塵ヲ脱シ、嘗テ喜怒ヲ生セス、寒暖ヲ憂ヘス、而シテ其智、明達周遍、知ラサルルナク、能ハサルナク、至ラサルナク、虚空界ノ如ク、遍満虚（p.15）心ナル者、之ヲ本覚ト云フ、此ノ本覚ノ性、煩悩妄念ノ為メニ擾サレ、無明ノ相ニ陥リタル者、之ヲ不覚ト云フ、然ルニ此不覚ノ相ニシテ仏、菩薩ノ薫陶ヲ受ケ、孑々怠ラスンハ日ニ月ニ其無明ナ徴覚シ、其妄念ヲ漸除シ、終ニ本覚ノ心性ニ入境スルコト疑ナシ、故ニ凡夫ハ始メニ其悪業ヲ覚シ、其次ハ念異ヲ覚シ、其次ハ念住ナ覚シ、終ニ微細ノ念ヲ遠離シテ心性ナ見ルコトヲ得ル、之ヲ究竟覚ト名ク、其不覚ト云ヒ始覚ト呼ヒ本覚ト名クルヤ、名別アリト雖トモ実ハ一阿梨耶識ノ所変ニ過キス、不覚ヲ離レテ本覚ナク、本覚ヲ離レテ始覚ナシ、若シ此識ニシテ（p.16）覚ニ始リ覚ニ終ラシメハ、亦何ソ本始ノ名ヲ立ンヤ、故ニ一切万法ハ尽ク此識ノ所摂ニシテ、之レヲ蔵識ト訳スルモノ、洵ニ其本義ヲ得タリト言フ可シ、

第二回

第一　真如ト生滅ノ分界

所謂一心ニ二門アリ、曰ク心真如、曰ク心生滅是ナリ、真如トハ体ニ約シテ云ヒ、生滅トハ用ニ約シテ云フナリ、夫レ一心ノ体トハ、絶相ニシテ染ニ非ス浄ニ非ス、生ニ非ス滅ニ非ス、動セス転セス、平等一味ニシテ、衆生即涅槃、生仏同一際ナルヲ一心ノ体ト云ナリ、又生滅トハ随縁起滅（p.17）ノ義ニシテ、即チ一心ノ体、一切諸法ノ縁ニ随ヒ、転動シテ染トナリ浄トナル、故ニ仏アリ衆生アルヲ、一心ノ用ト云ナリ、然レハ生滅ノ染浮ヲ離レテ、真如ノ理体アルニ非ラス、真如ノ理体ヲ離レテ生滅ノ動用アルニ非ラス、故ニ『勝鬘経』ニ曰ク、「不染ニシテ染、染ニシテ不染ナリ」ト、譬ハ大海ノ如ク、水ヲ離レテ波アルニ非ス、波ヲ離レテ水アルニ非ス、然レハ一心ノ大海ニ、真如ノ水ト生滅ノ波アルカ故ニ、心真如門、心生滅門ト云ナリ、然レトモ真如門ヲ以テ一切法ヲ摂スレハ、一々ノ法、尽ク真如ニ非サルナク、又生滅門ヲ以テ一切法ヲ摂スレハ、一々ノ法、尽（p.18）ク生滅ニ非サルハナシ、必竟真如ト生滅トハ相異ニシテ同一視スヘカラス、彼水ヲ呼テ波トナサス、波ヲ名ケテ水トセサルカ如シ、又泥土ヲ以テ作リタル瓦器ノ如ク、瓦器ヲ指シテ泥土トナサス、泥土ヲ以テ瓦器ト稱セサルナリ、是ヲ以テ一法界大總相ヨリ謂トキハ、真如生滅皆一体ナリ、真如生滅ヨリ謂トキハ真如ハ真如ニシテ生滅ニアラス、生滅ハ生滅ニシテ真如ニアラス、猶ホ帝

王ヲ唱テ乞食トナサス、乞食テ名ケテ帝王トセサルカ如シ、故ニ上ハ仏界ヨリ下ハ禽獣草木ニ至ルマテ、尽ク一法界中ニ游泳シテ暫時モ離レス、唯其レ妄念ニ依ルカ（p.19）故ニ生滅ノ差別アリ、若シ能ク妄念ヲ解脱スレハ、則チ是レ不生不滅ノ真如ナリ、故ニ実ノ如ク自心ヲ知ルヲ菩提ト名ケ、虚妄ニ依テ自心ヲ知ラサルヲ煩悩ト名ク、是レ一大法界ニ真如生滅ノ二門アル所以ナリ、

第二　始本二覚ノ弁

本覚トハ謂ク、心体離念ノ相ニシテ虚空界ニ等シ、虚空界トハ十種ノ義アリ、一ニハ無障義、二ニハ周偏義、三ニハ平等義、四ニハ広大義、五ニハ無相義、六ニハ清浄義、七ニハ不動義、八ニハ有空義、九ニハ空々義、十ニハ無得義、此ノ如ク自在ニシテ義用差別アリト雖トモ、其体ニ拠テ（p.20）言ハ同一法性ノ理ニシテ差別ナシ、即チ如来平等ノ法身ナリ、其法身ニ依テ本覚ト名ク、既ニ法身ノ本覚ナリ、故ニ新成ノ覚ニアラス、始覚トハ本覚ニ対シテ始覚ト説ク、本覚ノ心体、無明ノ縁ニ随ヒ妄念ヲ起シ、六道ノ四性ニ浮沈シテ種々ノ相ナ起スヲ不覚ト名ク、其不覚アルノ故ニ微覚厭求ノ脩行ニ由テ、或ハ相似覚ヲ証シ、或ハ随分覚ヲ証シ、漸々ニ菩薩尽地ニ至テ初メテ一念相応心ノ初起ヲ覚ス、是ヲ始覚ト云、然レトモ始覚ノ時ニ始メテ本覚ヲ得ルニアラス、本覚ノ理性ハ本来常恒、不変ニシテ全存ス、唯始覚ノ時ニ始メテ其理性ヲ顕ハスノ（p.21）ミ、恰モ風力ニ由テ雲舞消散シ、始メテ本来アリシ月光仰クカ如シ、始覚ハ風力ニシテ本覚ハ本来ノ月光ナリ、故ニ曰ク、始覚ハ其体智ニシテ本覚ハ其体理ナリ、

第三　真如本覚ノ同異

真如トハ一法界大總相法ノ体ナリ、其法門ヲ究尽スル如来平等ノ法身智ヲ本覚ト云フナリ、然レハ平等ノ理、所達ノ境ヲ真如ト云ヒ、平等ノ事、能達ノ智ヲ本覚名クルナリ、故ニ真如ト本覚トハ法ト人トノ差別アルカ

第四　無明ノ実体

（p.22）無明ノ実体、果シテ有カ無カ、將又有無カ、是レ吾々凡夫ノ能ク得知スヘキニアラス、何トナレハ吾々生レナカラニシテ無明ノ為メニ熏習セラレ、常ニ無明ヲ脱スル能ハサルヲ以テ、安ソ能ク無明ノ実体ヲ知ランヤ、無明中ニアリテ無明ヲ知ラント欲スルハ、猶ホ青鏡ヲ以テ物ヲ見ル如ク、物トシテ青色ナラサルハナシ、無明ノ心ヲ以テ物ヲ見ル、物トシテ無明ナラサルハナシ、焉ソ能ク其自ラ無明ナルヲ知ランヤ、無明ノ始メハ殆ント知ルヘカラス、故ニ無始無明ト云フ、蓋シ無明熏起スルトコロノ識トハ、凡夫二乗ノ能ク解クスコロニアラス、又（p.23）菩薩究竟地モ尽ク知ル能ハス、唯仏ノミ能ク究了ス、無明ハ惑障ノ源タルコト最モ明ニシテ、其実体ノ何物タルヤ知ル可ラス、然レトモ無明ハ常ニ覚性ヲ離レス、覚性ヲ離レテ無明ナク、無明ハ覚

性ノ無明ナリ、之ヲ大海ノ水ニ喩フルニ、其波動ハ常ニ水ヲ離レス、水ヲ離レテ波動ナキナリ、又小童ノ路頭ニ迷フモ、方ニ依ルカ故ニ迷フ、若シ方ヲ離レハ何ノ迷カ之アラン、古人曰、無明実体即仏性ト、至言ナルカナ

第五　迷悟ノ顕相

迷悟ノ分際ヲ弁スルニ真俗二門ノ別アリ、真諦門ニ約（p.24）スレハ生仏染浄一体ニシテ迷悟ノ別ナシ、恰モ清水濁水ノ水体ハ同一ナルカ如シ、然ルニ俗諦門ニ約スレハ仮名万差ノ諸法アリ、浄穢因果ノ別アリ、苦楽昇沈ノ不同アリ、之レ迷悟ノ大ヒニ相別ル所以ナリ、抑モ迷惑ノ顕相トハ如何、人生レテ自性清浄ナリ、而シテ一法界ニ達セサルヲ以テ心相応セス、忽然念起ヲ無明ト名ク、無明ノ為ニ染ラレテ染心アリ、而シテ染心ニ六種アリ、曰執相応染、曰不断相応染、曰分別智相応染、曰現色不相応染、曰能見心、曰根本業不相応染是ナリ、此六染心ニ由テ妄リニ愛憎ヲ生シ、為メニ苦楽ノ念ヲ断ツ能ハス、又其境（p.25）界ヲ縁念シ、其苦楽ナ住持シ、以テ心ノ執着ヲ起シ、為メニ名言仮相ニ迷テ種々ノ業ヲ造リ、遂ニ業ニ依テ報ヲ受ケ、其身自在ナラス、或ハ身ヲ行溝ニ沈メ、或ハ首ヲ木間ニ懸ケ、或ハ刑戮ニ就ク者、果シテ幾何ソヤ、是レ所謂迷惑ノ顕相ナランカ、次ニ悟達ノ顕相トハ如何、人性皆生死ノ苦ヲ厭ヒ涅槃ノ楽ヲ求ム、此厭苦求楽ノ情ニ本テ、孜々矻々怠ラスンハ、妄心邪執漸次ニ除駆セラレ、身外妄境界、随テ撲滅セラレ、其終ニ涅槃ヲ得テ自然ノ業ヲナスヤ必セリ、是レ所謂菩薩究竟覚ノ位ニシテ、方便ヲ満足シ一念相応シテ心ノ初起ヲ覚シ、心ニ初相ナク（p.26）能微細念ヲ遠離ス、故ニ其心性ヲ見ルヲ得テ、心常生ナリ、之ヲ悟達ノ顕相ト謂フナリ、然レトモ、是レ殊ニ俗諦門ヨリ言フノミ、若シ真諦門ヨリ言フトキハ更ニ迷悟ノ別ナシ、其故ハ一切衆生本来涅槃寂滅ノ性ヲ具ヘタリ、故ニ経ニ、「諸法従本来、常自有寂滅相」ト説ケリ、

第三回

第一　円覚

円覚ハ其体、虚無洞然見ルヘカラス、又能ク捉フ可ラス、而シテ其用、霊妙神通至ラサルナク、能ハサルナシ、苟モ生ヲ天地ノ間ニ受ル者、未タ嘗テ始メヨリ円覚ノ性ヲ（p.27）具セスンハアラス、若シ此性無セハ、之レ心ヲ亡スルナリ、亡心スル者、之レ生物ニアラサルナリ、然ルニ今ヤ眼ヲ開テ広ク人類社会ヲ観察スルニ、各其性質ヲ殊ニシテ賢愚利鈍強弱優劣ノ別アル者、何ソ人生ルルヤ、円覚ノ清浄心ト無明ノ惑体ト、相和合混同スル者、之ヲ普通人類ノ心体トスレハナリ、而シテ此無明熏習ノ厚薄麁細ニ由テ、千差万別ノ妄分別妄境界ナ現出スルナリ、然ルニ衆生、常ニ如幻ノ境界ニ浮沈シ、妄情ノ為メニ纏牽サレ、何レノ日カ能ク如幻ノ如幻ナルヲ知テ、之レヲ解脱センヤ、曰ク、如幻覚心ヲ離レス、無明真如ト同一体ナ（p.28）リ、如幻ノ当体乃チ円

覚ナリ、故ニ六道ノ業ヲ脩シ、戒定恵ノ道ヲ踏ミ、如幻ヲ以テ如幻ヲ攻究スレハ、諸幻、立トコロニ断滅ス、譬ハ両木相摩擦スレハ、為メニ火ヲ生シテ木尽灰飛煙滅スルカ如キナリ、然リ而シテ円覚ノ自性、始メヨリ恆有ナルナリ、故ニ無明業ニ已ニ断スレハ本有ノ円覚、自カラ顕見スルナリ、猶ホ濁水ヲ蒸留スレハ其儘清水トナリ、濁水ヲ離レテ清水ナキカ如キナリ、故ニ曰ク、「円覚ニシテ未タ円覚ナラサル者ハ凡夫ナリ、円覚ヲ具足シテ円覚ヲ住持スル者ハ如来ナリ」ト、唯其レ無明ノ惑体ヲ解脱シテ、円覚ノ極妙楽果ヲ得ルハ、独（p.29）リ仏者ノ能スルトコロノミ、他教ニ於テ希ニアリ絶テナシ

第二　仏性

仏性トハ何ソ、一心ノ実性ナリ、此性ヲ発覚スレハ所謂成仏ナリ、菩提ナリ、故ニ『大日経』ニ曰、「云何菩提、謂如実知自心也」ト、又『観無量寿経』ニ曰、「諸仏正偏智海、従心想生」ト、又嘗テ達磨云、「直指人心見性成仏」ト、是レ皆ナ各自本有ノ心性ヲ実驗覚知スルノ言ナリ、人、生ナカラニシテ此性ヲ具セサルハナシ、而シテ其常ニ生死ニ流転シ、色欲ニ沈溺シ、種々ノ罪業ヲ犯シ、桎梏ニ繫縛サルヽ者、何ソ、(p.30)無始ノ根本無明、仏性ヲ遮蔽スルアレハナリ、此ニ於テヤ見聞スルトコロ、尽ク執着ヲ起シ、終ニ有無ニ迷惑シ動静ラ転倒スルニ至ル、空華ハ固ヨリ無ナリ、而シテ我眼病ムトキハ即チ華ヲ虚空ニ見ル、又雲馳舟行ヲ知ラサレハ月運岸移ト誤想スル如キナリ、故ニ舎摩他ノ行ヲ修シテ妄情ヲ抑制シ、般若ノ智恵ヲ以テ妄見識ヲ矯正スレハ、本具ノ仏性、自カラ顕見シ、前ノ煩悩疑惑ハ釈然其跡ヲ見ス、唯仏性ノ、始ヨリ独存スルヲ見ルノミ、猶ホ医師ニ就キ眼病ヲ治スレハ、空華自ラ滅シテ空ハ始メヨリ空ナリ、雲馳舟行ヲ悟レハ岸月ノ元ヨリ静ナルヲ（p.31）知ル如キナリ、

第三　一法

一法トハ何ソ、一心ナリ、蓋シ心ノ活動タルヤ、自カラ一定ノ法則アリ、其不規則ナル者ハ特ニ心ノ真性ヲ失シタルノミ、苟モ心全ケレハ其活動スルヤ一々必然ノ理アリ、故ニ之ヲ法ト云フ、心ハ平等一味ニシテ其実性常恒不変ナリ、其変動ヲ見ルハ殊ニ其活動ノミ、其実性ハ本来平等不変ナルナリ、猶ホ海水ノ波瀾ヲ生スルモ、其水性ヲ失セサル如シ、故ニ之ヲート云フ、輓近科学ノ進歩スルヤ理学ニ化学ニ地質ニ天文ニ、上ハ日月星辰ヨ（p.32）リ下ハ禽獣草木ニ至ルマテ、其元因ト発達ト結果ニ付、微細ニ其法則ヲ正シ其関係ヲ論スルヤ至レリ尽セリト云フヘシ、然ルニ哲学心理学ニ至リテハ、往古希国ノ「プレート」「アリストートル」ノ輩、之ヲ講究スルモ其主義不完全、其論法甚タ不充分、且時代遠遐ニ屬シテ其教法最モ不分明、故ニ之ヲ伝傳ル者モ之ヲ講究スル者モ更ニナキナリ、其堂々新科学ノ範圍内ニ列シタルハ第十六世期仏國ノ「デカート」ヲ以テ祖師トス、此ニ於テ一心ノ活動ニ一定ノ規律アルコトヲ発明セ

リ、次テ歴史学社會学起レリ、然ルニ釈氏数千年前ニアリ、業ニ已ニ一心ノ（p.33）活動ニ自ラ一定ノ法規アリテ、敢テ偶然ナラサルコトヲ瞭知セリ、而シテ其教法卓然、今日二現存シ、独リ印度一地方ニ止マラス、広ク漢土日國ヲ化益シ、遠ク東洋文明ノ基礎タリ、嗚呼、釈氏活眼以テ千歳ノ下ヲ徹観ス、千古ノ英傑ニアラスンバ万年ノ聖人カ

第四　正因

宇宙万物ノ生々スルヤ、必ス其元因ナカルヘカラス、天地ノ始メハ渾沌ノ氣ナリ、万物ノ始メハ天地ナリ、子ノ始メハ親ナリ、草木ノ生長スルヤ其種子アリ、河水ノ流ルルヤ必ス其原泉アリ、故ニ元因ヲ離レテ結果ナク、結（p.34）果ヲ離レテ元因ナシ、結果ハ元困ノ結果ナリ、元因ハ結果ノ元因ナリ、雀ハ雀ヲ生ミ、鷲ハ鷲ヲ生ム、白人ハ白人ヲ生シ、赤人ハ赤人ヲ生ス、是レ最モ易見ノ理ナリ、今ヤ衆生ノ転迷開悟スルヤ、復又正因勿ル可ラス、若シ此因無セハ、如何ニ修業スルモ如何ニ方便ヲ尽ストモ、到底涅槃ノ楽ヲ得、菩提ノ果シ得ヘカラス、猶ホ雀巣ニ鷲ヲ得ヘカラス、白母ニ黒子ヲ得ヘカラサル如シ、故ニ如来ハ法ヲ授クル者ニアラス、唯衆生ヲシテ其本有ノ法ヲ培養発育スルノ方法ヲ知ラシムルノミ、法ハ如来ノ専有ニアラス、天下ノ公有ナリ、法ハ此ニアリ、彼ニアラス（p.35）内ニアリ、外ニアラス、然レトモ此因ニシテ其縁ニ逢サレハ到底其果ニ達ス可ラス、是レ教理行果ノ次第アリ、信解行証ノ階梯アル所以ン乎、譬ヘハ種子ハ雨露ノ養ヲ得テ喬木トナリ、赤子ハ父母ノ手ニ由テ成人トナル如シ、

第五　止観定恵

止ハ以テ定ヲ致シ、観ハ以テ恵ヲ生スルナリ、而シテ此二者円覚ヲ証得スルノ良方便ナリ、其レ外物ノ耳目ニ觸ルルヤ、種々万差ノ感情ヲ惹起シ、為ニ清浄ノ円覚心ヲ錯乱スルナリ、故ニ此心ヲ証得セント欲セハ、先ツ外界ノ刺戟ヲ抑制シテ、内心ヲ寂静ニセサル可ラス、心既（p.36）ニ已ニ寂静ニシテ而後般若ノ知恵ヲ以テ、事物ノ理ヲ観察スレハ、円覚ノ自情顕現シテ、事々物々自在無碍ナリ、是レ仏教ニ三学ノ法アリテ存スルユヘンカ、三学トハ何ソ、曰、戒定恵之ナリ、一戒トハ戒律ニシテ、有情ノ三業ノ非ヲ防キ悪ヲ止ルコトナリ、二ニ定トハ散乱ヲ止メ心ヲ寂静ナラシムルコトナリ、三ニ恵トハ愚痴ヲ対治シテ知恵ヲ明瞭ナラシムルコトナリ、此三学ヲ『成実論』ニハ「戒如捉賊、定如縛賊、恵如殺賊」トアリ、蓋シ始メニ戒ヲ立テテ三業ノ過非ヲ制シ、次ニ定ニ入テ心ヲ静メ、後ニ恵ヲ起シテ煩悩ヲ断スルニ喩ルナリ、以上所化ノ衆生（p.37）ニ就テ論スル次第ナリ、若シ能化ノ仏ニ約スルトキハ、定戒恵トナルナリ、其故ハ、先入定シテ衆生ノ機ヲ監ミ、次ニ戒律ヲ説テ威儀ヲ整ヘシメ、後ニ心地ヲ開テ智恵ヲ授クレハナリ、

第四回

第一　無明

人性ニ淳雑ヲ立ルハ是レ仏教ノ他教ニ異ナルユヘンニシテ、而シテ其能ク他教ニ超然タルユヘン、亦此ニアルカ、淳ナル之ヲ真如ト云ヒ、菩提ト云ヒ、又涅槃ト云ヒ、雑ナル、之ヲ生滅ト云ヒ、又無明煩悩トモ云フ、今頃ク其雑（p.38）ナル者ニ就キ之ヲ論セン、抑モ無明ナル者、無始以来一切動物ノ生因ニ具スルトコロノ惑体ニシテ、衆生ノ生死ニ流転シ彼我事物ノ間ニ迷惑シ、無ヲ有トシ一ヲ二ト誤リ、妄ニ華ヲ空中ニ望ミ、月辺更ニ第二ノ月ヲ仰クノミナラス、其迷惑ノ由テ基クトコロヲ察セサル如キ、全ク無明ノ然ラシムルナリ、釈氏活眼、夙ニ爰ニ見ルトコロアリ、痛ク救世ノ念ヲ発シ、深ク真理ノ所在ヲ探究シ、広ク天下衆生ノ為メニ極妙楽果ノ大道ヲ説ケリ、嗚呼、其教ノ千歳ノ下赫々タル、豈偶然ナランヤ、然レトモ無明ナル者、独リ其実體ヲ存スル者ニアラス、其本性固ヨリ（p.39）無ナリ、其無明、真如ト俱生ス、故ニ真如ヲ離レテ無明ナク、無明則チ真如ナリ、其体一ニアラス、異ニアラス、猶ホ濁水ヲ離レテ清水ヲ見ス、海水ヲ離レテ波濤ナキカ如キナリ、真如ト無明ハ無始以来、相離ルヘカラス、故ニ六度ノ業テ修シテ三学ノ道ヲ踏ミ、三観ヲ次第ニ随順スレハ、本具ノ覚性任運ニ顕見シテ前ノ無明断滅シ、更ニ其踪跡ヲ見サルナリ、之ヲ覚性ノ円満ト云フ、是レ前ニ無明アリ、後ニ覚性ヲ生シタルニアラス、覚性ハ常住不変ニシテ、時ニ顕晦アルノミ、顕ナル之レヲ覚ト云ヒ、晦ナル之ヲ無明ト云フ、猶ホ濁水ヲ蒸留スレハ清水トナリ、(p.40) 而シテ清水ノ自性ハ始メヨリ濁水中ニ存スル如ク、清水泥土ノ為メニ混濁スレハ須ク之ナ濁水ト云ナリ、故ニ無明、新ニ滅スルニアラス、初ノヨリ其体無ナリ、本覚新ニ生スルニアラス、初メヨリ円満常住スルナリ、

第二　本来成仏

円覚ノ覚性ハ宇内ニ円満周遍シテ、苟モ生ヲ有スル者未タ嘗テ此性ヲ具セスンハアラス、而シテ此本具ノ覚性ヲ証得スルヲ成仏ト云フ、故ニ達磨云、直指人心、見性成仏ト、又『経』ニ、「如実知自心、明見仏性」トアリ、是レ直ニ人々本具ノ心性ヲ見徹スルヲ成仏トスルノ義ナリ、蓋シ（p.41）此円覚ノ性ハ、衆生ニアリテ初メヨリ常住不変、不増不減ナル者ナリ、唯無明煩悩ノ纏縛スルトコロトナリ、妄リニ種々ノ幻化ヲ生スルナリ、人或ハ云ン、既已ニ如幻ノ中ニ展転ス、如何ソ此覚性ヲ証得セン、夢中ニアリテ夢ノ夢ナルヲ知ラサル如ク、安ソ如幻ヲ以テ如幻ノ如幻ナルヲ知ンヤト、曰、如幻ヲ以テ如幻ヲ修スレハ、諸幻尽ク断滅シテ更ニ其痕跡ヲ見ス、猶ホ木ヲ以テ木ヲ鑽レハ、火生シテ両木焼尽シ、従テ煙灰ノ飛散スル如キナリ、諸幻業已ニ断滅スレハ、本具ノ覚性、自カラ顕見ス是レ則チ成仏ナリ、復何ソ方便漸次ヲ用ユルコトヲセン、(p.42)

第三　輪迴

輪廻トハ生死ノ間ニ展転スル義ナリ、一切衆生、生レナカラニシテ種々ノ恩愛貪欲アリ、既ニ之ヲ愛スレハ従テ之ヲ欲ス、之ヲ欲スレハ亦従テ之ヲ愛スルヤ熱シ、愛欲交モ助発シテ種々ノ迷執邪見ヲ起シ外色物ノ喜フヘキヲ見テハ之レニ執シ内身命ノ愛ス可キヲ思フテハ之レニ着シ得失ニ汲々シ彼此ニ矻々ス一得大楽一失大嘆、憎愛ノ念中ニ炎シ、妄境界前ニ百出シ、為ニ種々ノ惑業ヲ起シ、棺ヲ蓋ルマテ惑業ノ為メ、繫縲サルル者、之レヲ生死ニ展転スト云フ、之レヲ輪迴ト云フナリ、故（p.43）ニ此輪迴ヲ脱シ、生死ノ惑ヲ解ント欲セハ、須ク其恩愛貪欲ノ妄念ヲ断ツヘシ、苟モ此妄念ニシテ断滅スルコトヲ得ハ、種々ノ妄境界、従テ断滅センノミ、従テ妄情迷執断滅シテ更ニ惑業ヲ起スナク、更ニ生死ニ流転スルナキナリ、是レ之ヲ永ク輪迴ヲ断尽シテ、如来円覚ノ妙境ヲ開悟スルト云フ、

第四　二障

二障トハ理障ト事障トナリ、理障トハ根本無明ノ惑ニシテ本来清浄ノ正知見ヲ遮蔽ス、之レヲ煩惱障トモ云フ、蓋シ五蘊ノ用ニ惑ヘル人執ヲ本トシテ、煩惱障ヲ起（p.44）セハナリ、小乗ニテハ理障ヲ染汚無智ト云フ、無明ヲ体トスレハナリ、事障トハ六種ノ染心ニシテ、曰執相応染、曰不断相応染、曰分別智相応染、曰現色不相応染、曰能見心、曰根本業不相応染、之ナリ、此六染心ヲ以テ生死ノ諸惑ヲ相続不断ナラシムル也、之ヲ所智障トモ云フ、蓋シ五蘊ノ体ニ惑ヘル法執ヲ本トシテ所智障ヲ起セハナリ、小乗ニテハ不染汚無智トモ、劣慧ヲ体トスレハナリ、凡夫ハ常ニ此二障ノ中ニアリテ彷徨シ、役々其繫縲ヲ脱スル能ハス、二乗ハ一分事障ヲ脱シテ未タ理障ヲ断スル能ハス、菩薩境界ニアリテハ二障、業已ニ征伏サレ、其（p.45）力ヲ逞スル能ハスト雖トモ、未タ全ク断滅ニ至ラス、然トモ終ニ修行ヲ成就シテ永ク事理ノ二障ヲ断滅スレハ、即チ能ク如来ノ微妙円覚境ニ入テ、仏果ヲ征センノミ、其レ機ニ頓漸アリ、或ハ厚薄アリ、是レ其教ニアリ、浅深アリ、時ニ前後アリ、境ニ優劣ヲ見ルユヘンカ

第五　方便三種

円覚ト云ヒ涅槃ト唱フモ、若夫レ之ヲ求ムルニ方便微セハ、何日カ能ク其真境ニ達センヤ、其境ニ達スル能ハスンハ、到底円覚ノ自性何タルナ知ル可ラス、其自性知ル可ラサレハ、円覚ノ有無モ知ル可ラス、必竟シテ仏教（p.46）ハ架空ノ論ノミ、何ヲ以テ一切衆生ヲ輪迴ノ間ニ救ハンヤ、然ラハ則チ何ヲ以テ世教トスルニ足ンヤ、此ニ於テカ、世尊夙ニ威徳菩薩ノ為メニ三種ノ方便ヲ丁寧反覆セリ、三種ノ方便トハ何ソ、曰奢摩他、曰三摩鉢提、曰禅那此ナリ、一切衆生、其機ノ利鈍ニ従テ、或ハ漸ニ或ハ頓ニ此ノ三種ノ方便ヲ修行スレハ、其円覚ノ妙界ニ証入スルコト、更ニ疑ナキナリ、一ニ奢摩他トハ寂静ノ義ニシテ、勤メテ其念慮ヲ静謐ナラシムルコトナリ、勤メテ其

念慮ヲ寂静ニスレハ任運ニ身心外界ノ妄念邪執ノ識ヲ煩動スルニ由ルコトヲ知ルナリ、此ニ於テ静慧ヲ起シテ此（p.47）妄念邪執ヲ征伏スレハ、従テ妄境界妄分別断滅サルルナリ、而後心寂静軽安ニ位スルナリ、然後、此寂静ヲ以テ宇内ヲ見レハ、円覚ノ妙理ハ万物ニ周遍シテ見聞スルトコロ尽ク円覚ノ理性ナラサルハナシ、猶ホ明鏡ヲ以テ物ヲ照セハ、万象ノ燦然之ニ影スル如キナリ、二ニ三摩鉢提トハ、如幻ヲ以テ如幻ヲ断滅スル方便智ニシテ如幻ヲ滅セント欲セハ、須ク先ツ幻法ヲ観察シテ種々ノ幻智ヲ起シ、幻智ニ由テ諸幻ヲ撲滅スヘシ、諸幻已ニ滅スレハ幻智モ亦従テ滅シ、終ニ円覚ノ妙境ニ証入スルナリ、猶ホ土ノ苗ヲ生シ、苗ノ穀ヲ生シ、穀熟スレハ苗（p.48）土復タ用ユルトコロナキカ如シ、三ニ禅那トハ寂滅ノ義ニシテ身心ノ妄境界、妄分別ヲ断滅シテ円覚ノ実相ヲ証得スルコトナリ、然レトモ之レヲ断滅スルニ別ニ奢摩他ノ如ク、勤テ寂静ナ収ラス、又三摩鉢提ノ如ク幻智ヲモ起サス、霊明ノ観智、廓爾トシテ無辺ナルカ故ニ、身心ハ塵域ニ浮沈スルモ観智ハ遠ク宇大ヲ照シ、洒落トシテ光風霽月ノ如シ、是ヲ以テ礙アルモ礙トセス、永ク礙無礙ノ境ヲ超過スルコトヲ得ルナリ、猶ホ鐘ノ器中ニ閟サレテ、其鳴声遠ク轟ク如シ、此ニ於テカ、則チ寂滅軽安ヲ得テ、円覚ノ妙境ニ証入ス、之ヲ禅那ト云フ、（p.49）

第五回

第一　本学特別ノ主義

印度哲学ノ特別ノ主義ハ、一心ノ真性ヲ発明スルニアリ、天下ノ人、誰レカ真如ナカラン、而シテ其行為千差万別、身ヲ汚溝ニ陥ルアリ、首ヲ樹間ニ懸クルモノアリ、一人モ純正ナル楽土ニ達スルナキハ何ソヤ、一切衆生無始以来、無明ノ為メニ纏縛サルルヲ以テ、活潑自由ノ働キヲナス能ハス、種々ニ展転スルナリ、然ルニ印度哲学、夙ニ一切衆生ノ心ニ真如ノ理ヲ具スルコトヲ発明シ、三学六道ヲ以テ煩悩所智ヲ断尽シ、一切衆生ニ涅槃ノ楽（p.50）果ヲ得セシメンコヲ勤ム、是レ印度哲学特別ノ主義ナリ

第二　一大事因縁

仏ノ出世説法スル、豈ニ偶然ナランヤ、当時ブラマ教盛ニ行ハレ、天下ノ人心邪教ニ漂サレテ、茫々其方向ニ迷フ、仏深之ヲ嘆キ、即チ一大教ヲ陸続説出ス、然レトモ人人其惑ニ浅深アリ、其性ニ利鈍アルヲ以テ、則チ頓人ノ為メニハ頓教ヲ説キ、漸人ノ為メニハ漸教ヲ説キ、以テ其惑理ノ心ヲ蒼海ノ中ニ救ハンコトヲ務メタリ、然ラハ則チ仏ノ出世説法スル、決シテ偶然ニアラス、天下ノ人企（p.51）足翹首、其授教ナ渇望ス、仏此ニ於テ大ニ説クトコロアリ、之レ一大事因縁ナリ、

第三　蔵来ノ概略

一蔵ハ経律論ナリ、是レハ仏一代ノ教法ヲ此三ニ摂尽ス、一ニ経トハ、錦ヲ織ルニ経

系ノ緯系ヲ持ツカ如ク、仏教ハ能ク義理ヲ保テ散セサラシメルカ故ニ経ト曰フ、二ニ律トハ、有情ノ三業ヲ調和シ、諸ノ悪業ヲ征伏スルコトニテ、之ヲ律ト云フハ能ク罪ノ軽重ヲ断決スルカ故ナリ、三ニ論トハ、無漏ノ智恵ヲ以テ四諦ノ理ヲ対観シ、涅槃ノ果ニ対向スル事ナリ、(p.52) 二乗トハ運載ノ義ニシテ、行人ヲ乗セテ因ヨリ果ニ運フ事ナリ、乃チ自利ト利他トヲ具有シテ、自他相運スルヲ大乗ト云ヒ、唯自運ノミアリテ他運欠ケタルヲ小乗ト云フ、大乗法トハ大人所乗ノ法ナリ、小乗法トハ小人所乗ノ法ナリ、大人トハ仏菩薩ナリ、小人トハ声聞縁覚ナリ、故ニ小乗法ハ浅近ナリ、大乗法ハ深遠ナリ、此外仏教ヲ一乗三乗ト別ツコトアリ、一切衆生皆成仏ノ理ヲ談スルヲ一乗ト云ヒ、声聞、縁覚、菩薩トノ因果ヲ格別ニ談スルヲ三乗ト云フ、又三乗ノ上ニ人天乗ヲ加ヘテ五乗ト云フコトアリ、(p.53)

第四　修証ノ概略

修証トハ何ソ、曰定慧ト悟修ノ頓漸ヲ出テサルナリ、一ニ定トハ散乱ヲ止メ心ヲ寂静ナラシムコトナリ、二ニ慧トハ愚痴ヲ対治シテ知慧ヲ明瞭ナラシムルコトナリ、此二ヲ日夜勉勵シ、以テ修証ノ道ヲ求ムヘシ、次ニ悟修ノ頓漸トハ、人々其心、利鈍賢愚アルヲ以テ、或ハ漸修漸悟、或ハ頓修頓悟ナルアリ、其変化ニ至テハ、予メ期スヘカラサルナリ、

第五　金鉱ノ法理

(p.54)

仏法浩漠、知リ易カラスト雖トモ、喩ヲ採ル巧ナレハ、敢テ難カラサルナリ、昔時世尊、金剛蔵ノ為メニ一塊ノ鉱ニ就テ法理ヲ説ケリ、其レ金ノ鉱中ニアルヤ固ヨリ金ナリ、銷ノ後チ金有ナルニアラス、金ハ初メヨリ鉱中ニ独存スルモノナリ、然レトモ銷セサレハ真金ノ体ヲ成スル能ハス、一タヒ真金トナレハ其光輝々、千古ヲ照スヘシ、故ニ銷ハ鉱ヲ変シテ金トナスニアラス、唯鉱中ノ金ヲ顕シテ真金ノ体ヲ成セシムルノ一良法便ノミ、然ルニ凡夫此理ヲ知ラス、銷スレハ金ト唱エ銷セサレハ鉱ト呼フ、銷能ク鉱ナ金トナスト思惟シテ疑ハス、是レ全ク (p.55) 転廻ノ致ストコロニシテ、天下ノ人、比々皆ナ然リ、又何ソ疑ハン、若夫仏ノ法観ヲ以テスレハ、天下ノ鉱、始メヨリ尽ク金ナリ、而シテ此、豈ニ容易ニ知ルコトヲ得ヘケンヤ

〈参考文献〉

(一次資料)

早川千吉郎編『高嶺君遺稿』(1888年)

(二次資料)

拙稿「原坦山の東京大学仏教学講義」『駒澤大学仏教学部論集』54号(2023年10月刊行予定)